

江戸における城下町の都市設計* ～町割の規範と街道・水系の関係～

A study on the design of urban structures in Edo City

阿部 貴弘**, 篠原 修***

by Takahiro ABE and Osamu SHINOHARA

abstract: Edo had well-woven urban structures composing of waterways and streets. These structural complexities have interested researchers for a long time. The purpose of the study is to understand the principles of design in the residential areas of Edo which had not been fully understood. In the study, using modern surveying maps, the sizes of the blocks and the angles of the crossing streets were measured and analyzed, considering the effect of topography. The authors estimated and certified the formation of the urban structure in each residential area, and the method in which the blocks were arranged concerning main streets and waterways.

1 はじめに

1590(天正18)年、家康が江戸入してから江戸時代の初期にかけて、江戸は大きな変化を遂げた。大規模な埋め立てや濠・堀割運河の開削が行われ、水路や街路の入り組んだ非常に複雑な、しかし面白い都市構造を有する都市へと発展していった。こうした水路網の発達した江戸において、都市がどういった過程で設計されていったのかを解き明かすことは、非常に興味深い所であり、都市史・建築史の分野で長い間研究が行われてきた。

2 江戸に関する既存研究

都市史・建築史の分野における既存研究は、その方法論により、次のように大まかに分類できる。

1. 文献を資料として用いた、文献学的アプローチ
2. 地質調査結果や発掘資料を用いた、考古学的アプローチ
3. 地図や絵図資料を用いた、都市地理学的アプローチ

本研究は、分析に地図を資料として用いている点で都市地理学的アプローチに位置づけることができるが、その中でも特に、都市の微地形的側面をも含んで分析を行っている点に、方法論的特徴がある。

以下に、都市地理学的アプローチで得られている既存研究を中心に、課題を簡単にまとめてみる。

(1) 町割の基準

まず、定説として町割の基準が明らかになっている¹⁾。江戸の街区は、京間60間四方の正方形街区が基準であり、街区内の町屋敷は、街路に面して間口を持ち、その奥行きは京間20間であった。街区の四辺に奥行き20間の屋敷が割り付けられたので、中央には20間四方の、会所地と呼ばれる空地が存在した。また、一つの町は街路に面した両側の町家で形成されていた。このような町の配置形式は「両側町」と呼ばれており、江戸に限らず近世城下町では一般的な町のあり方と見てよいが、江戸の場合街区が正方形で、縦横の通りそれぞれに面して両側町となっていることが特徴であった。1657(明暦3)年の明暦の大火以後、会所地を貫通する街路(これを新道と呼ぶ)が通され、会所地の建物化が始まった。

町割の基準に関する、より即地的な研究では、まず、玉井哲雄²⁾が、沽券絵図と呼ばれる江戸時代の絵図を基に、メインストリートであった日本橋通りと本町通りの関係を解明している。宮本雅明³⁾は、本町通り・日本橋通りなどの軸線、江戸図屏風に见られる町地の交差点に建つ角屋敷の三階櫓に着目し、ヴィスタに基づいて都市設計が行われたと結論づけている。また、鈴木理生⁴⁾は、微地形に着目して、都市が排水を最優先に考え設計されたとしている。しかし、これらの研究においては、定説とされるまでの研究成果は得られておらず、町割と水系・地形との関係は明らかになっていない。

* keywords: 江戸、町人地、都市設計、地形・水系

** 学生会員 東京大学大学院修士1年 社会基盤工学専攻

*** 正会員 工博 東京大学大学院教授 社会基盤工学専攻
(〒113 東京都文京区本郷7-3-1)

(2) 濠・堀割運河等の水系の設計

鈴木理生⁵⁾が、地質調査結果、近世考古学の資料を基に非常に詳細な研究を行い、都市の全体的な濠・堀割運河等の水系設計の実際について言及している。しかし、地区単位でのより具体的な水系設計については明らかになっていない。

(3) 都市全体の計画・設計

内藤昌⁶⁾は、濠・堀割運河・川・街道の平面的広がりや、武家地・町人地・寺社地・見附(城門)の配置に着目し、都市が右渦巻状、つまり「の」の字状に発展していったとしている。鈴木理生⁷⁾は、地質調査結果、近世考古学の資料を基に、マクロな視点からの都市計画・設計の過程を解明している。都市の計画・設計に関しては、マクロな視点から大筋は明らかになっているものの、地区単位での計画・設計の実際は明らかになっていない。

3 目的・対象

以上のような既存研究を受けて、本論では、近世城下町江戸の下町町人地を対象に、

1. 町割と、その水系、街道との関係における設計基準の存在の有無

2. 地区単位での計画・設計の実際の解明を試みる。

4 分析方法

(1) 既存研究の分析視点

既存研究には、街区形態・主要街路の軸のとり方・微地形に着目したものがある。街区形態に着目した研究^{8) 9)}では、街区が基準から「ずれ」ているのかいないのかのみに着目され、基準からのずれの度合いやずれの要因にはふれられていない。主要街路の軸に着目した研究^{10) 11) 12) 13)}でも同様に、軸がずれているのかいないのかのみに着目され、ずれの度合いやずれの要因にはふれられていない。一方、微地形に着目した研究^{14) 15) 16)}からは、江戸の主要街道が微高地を通過していたことが明らかになっている。

(2) 本研究の分析視点

これらの研究成果を踏まえ、本研究では、街区形態・街路交差角・微地形を定量的に分析することを試みる。

a) 街区形態

地図の計測により、街区が、町割の基準とされている京間60間四方の正方形街区から、どの程度ずれ

ているかに着目する。ずれが小さく、60間四方の正方形街区に近い街区が多い地区では、基準に則った町割が行われたといえる。一方、ずれが大きい場合でも、街区形態や街区幅・街区の角度に統一性がみられれば、その地区では何らかの基準があり、その基準に基づいて町割が行われたとみることができる。ずれが大きく、街区に何の統一性も見られない不整形街区が多い地区では、町割に対して水系や地形などの別の何らかの要因が、大きな影響を与えていると考えられる。

b) 街路交差角

地図の計測により、街路の交差角が基準からどの程度ずれているのかに着目し、街区形態と同様に考える。街路が直角に交差している地域では、基準に則った町割が行われたといえる。直交していなくても、交差角に統一性が見られれば、その地域では何らかの基準があり、その基準に基づいて町割が行われたとみることができる。交差角に何の統一性も見られない場合、そこでは、水系や地形などの別の何らかの要因が、町割に対して大きな影響を与えていると考えられる。

以上のように街区形態・街路交差角のずれの度合いに着目することで、設計の際何が優先されたのかを明らかにすることができると考える。

c) 微地形

既存研究により、江戸の主要街道は微高地を通過していたことが明らかになっている^{17) 18) 19)}。町人地では、街道がメインストリートであったことから、都市設計を読み解くに当たって有効と考え、分析の視点に加えた。

(3) 計測方法

a) 街区辺の長さの計測

計測は、明治初期(明治17年~明治18年)に内務省地理局によって発行された縮尺5千分の1の東京実測全図²⁰⁾(以下、内務省図と呼ぶ)上で行う。さらに、国立歴史民俗博物館により作成された、江戸時代の復元図²¹⁾の町屋の街区を内務省図に対応させて計測する。内務省図は、近代測量によって作成された最初の精密な測量図である。江戸時代の復元図には、寛永期、寛文・延宝期、幕末期、の3種がある。これらは、内務省図などを基本図とし、それに江戸時代の各時期の絵図を照合し、おとしたものである。町家の中には後の堀の開削等により、計測できないものがある。これらの町家は、計測対象外とする。さらに、江戸前島地区の京橋~新橋間は、明

治時代（明治5年～明治10年）に入って街路の拡幅整備が行われたので、内務省図では江戸時代に比べ、街区がやや小さくなっていると考えられる。

計測結果は、京間の間を単位として表すが、

1. 計測する地図の縮尺が5千分の1であること
2. 計測の際の単位はメートルで、計測に用いた三角スケールの最小目盛りが2メートルのため、2メートルごとの計測であり、それを間単位に変換し、さらに小数点以下を四捨五入していること

から、1間程度は誤差としてあらわれてくると考えられる。

$$1 \text{ 間 (京間)} = 6.500 \text{ 尺} = 1.970 \text{ m}$$

$$1 \text{ m} = 3.300 \text{ 尺} = 0.508 \text{ 間 (京間)}$$

b) 角度計測

計測には内務省図を用い、街路の中心線の交差角を計測する。

c) 微地形

微地形をみるには、明治20年の東京全図²²⁾を用いる。この地図は尺を単位とした詳細な等高線表示をした地図で、標高20尺以下は1尺ごと、標高20尺以上は5尺ごとに等高線が入っており、微地形をみるに適した地図である。

d) 内務省図と参謀本部図

内務省図と同時期（明治19年～明治20年）に、参謀本部陸軍部測量局が作成した、同じく縮尺5千分の1の東京図²³⁾（参謀本部図）がある。これも近代測量によって作成された地図である。本研究で、参謀本部の地図ではなく内務省図を用いたのは、1.参謀本部の地図では街区と道路の境界が明示されていないため街区の特定が難しい点、2.原図どうしをつなぎ合わせる際、参謀本部の地図のほうが街路・濠・堀割運河の幅員に誤差が大きい点、3.江戸時代の復元図が、絵図を内務省図におとして作成されている点、4.微地形を見る際用いた地図が内務省図系の地図である点による。

5 分析結果

(1) 江戸前島地区

a) 日本橋～京橋間（図1）

ここは、外濠・日本橋川・京橋川・楓川に囲まれた地区である。日本橋と京橋を結んで、日本橋通りが通されている。寛永期には、ここには船入堀があったが、1690（元禄3）年までに全て埋められた（図5）。

計測の結果からこの地区をみると、以下のようになる。

1) 街区形態（図2）

1. 京橋川、日本橋川沿いに不整形街区が存在する。
2. 日本橋通りに平行方向の街区幅は、中橋広小路を挟んでほぼ60間に整合性が保たれている。
3. 日本橋通りに垂直方向の街区幅は、街道の両側一皮はほぼ60間に保たれているが、その外側、外濠側は56～58間、楓川側は64～66間となっている。

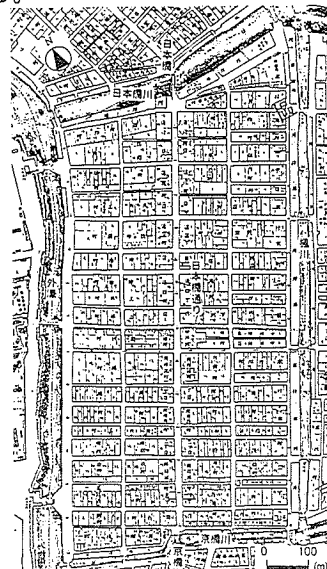


図1 日本橋～京橋間 内務省図（引用文献20）

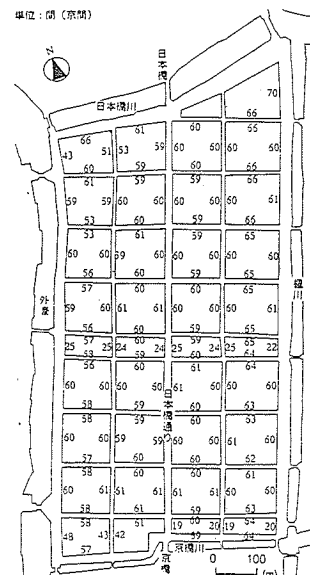


図2 日本橋～京橋間 街区幅計測結果（作成：阿部）

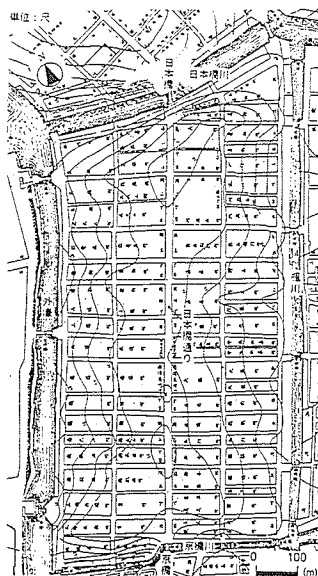


図3 日本橋～京橋間 東京全図
(引用文献22)

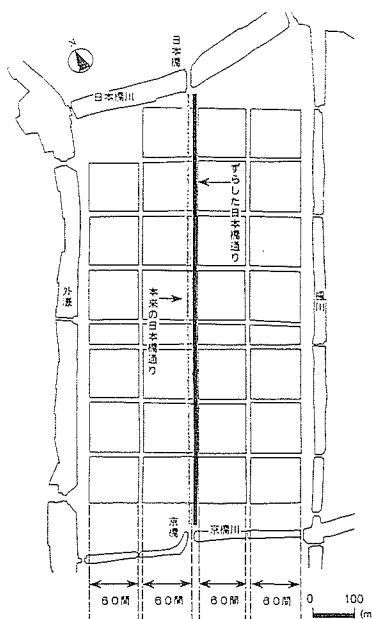


図4 日本橋～京橋間
日本橋通りをずらした図
(作成：阿部)

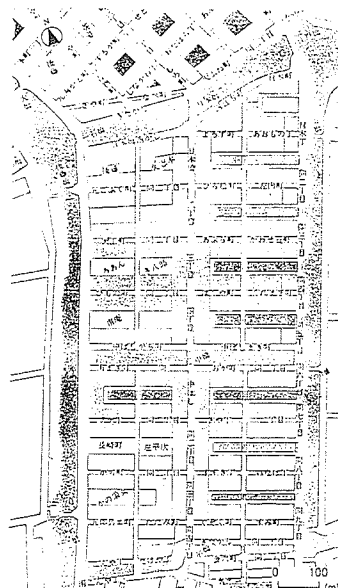


図5 日本橋～京橋間 寛永期復元図
(引用文献21)

2) 街路交差角

街路は直角に交差している。

3) 微地形 (図3)

1. 微高地に日本橋通りが通されている。
2. 低地に沿って京橋川が屈折している。

以上の結果から、次のように分析できる。

1. 濠・堀割運河際は濠・堀割運河に影響を受けた町割が行われたと考えられる。
2. 日本橋通りを楓川側に3～4間程度ずらせば、日本橋通りと垂直方向に街区幅60間ずつの4列の町割が可能だが(図4)、そうしていない。これは、日本橋通りを微高地に通すことを最優先とし、それを軸に町割が行われたためであるといえる。従って、外濠・楓川の開削位置は、町割の基準とは別の原理で決められたと考えられる。
3. 日本橋通りに平行方向の街区幅が、中橋広小路(船入堀があったところ(図5))を挟んで60間で整合しており、また、他の船入堀があったところで町割が船入堀の影響を受けていないことから、船入堀と町割は、同時期に計画・設計されたと考えられる。
4. 京橋川は、低地に沿って開削したために屈折していると考えられる。
5. この地区の屋敷割および新道の方向をみると、

街区角地の屋敷割は、日本橋通り沿いは日本橋通りに表を向いているが、他の場所では日本橋通りに垂直な街路の方に向いている。また、新道も日本橋通りに対して垂直方向に通されている。このことから、この地区では日本橋通りに垂直方向の街路設計が卓越していたといえる。これは、通りに垂直に開削されていた船入堀の影響もあると考えられる。

b) 京橋～新橋間 (図6)

ここは、外濠・京橋川・汐留川・三十間堀に囲まれた地区である。京橋と新橋を結んで、日本橋通りが通されている。明治初期(明治5年～明治10年)に街路の拡張整備が行われたので、計測に用いた内務省図では街区が小さくなっている。

計測の結果からこの地区をみると、以下のようになる。

1) 街区形態 (図7)

1. 濠・堀割運河沿いに不整形街区が存在する。
2. 日本橋通りに平行方向の街区幅は、整合性が保たれている。
3. 日本橋通りに垂直方向の街区幅は、ばらつきが大きくなっている。
4. 図7の点線で囲まれた地区では、奥行きほぼ20間の長方形街区が2街区取られている。

2) 街路交差角

街路は直角に交差している。

3) 微地形 (図8)

微高地に日本橋通りが通されている。

以上の結果から、次のように分析できる。

1. 濠・堀割運河際は濠・堀割運河に影響を受けた町割が行われたと考えられる。
2. 日本橋通りを外濠側にずらせば、通りの両側に60間の街区を取ることも可能だが (図9)、そうしていない。これは、日本橋通りを微高地に通すことを最優先とし、それを軸に町割が行われたためであるといえる。つまり、日本橋～京橋間と同様

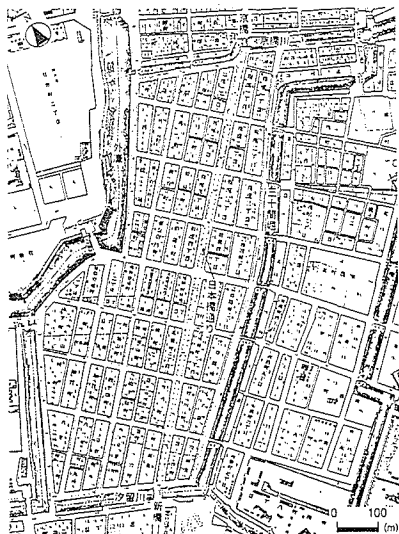


図6 京橋～新橋間 内務省図 (引用文献20)

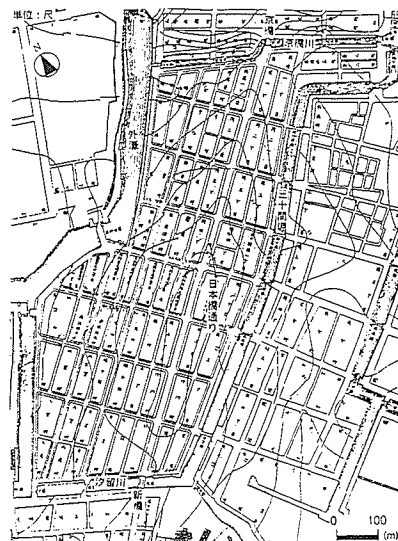


図8 京橋～新橋間 東京全図 (引用文献22)

に、外濠・三十間堀・汐留川の開削位置は、町割の基準とは別の原理で決められたと考えられる。

3. 図7の点線で囲まれた地区では、京橋川と三十間堀の間に奥行き20間の街区がとれるように、三十間堀を屈折させて開削したと考えられる。
4. この地区の屋敷割および新道の方をみると、街区角地の屋敷割は、日本橋通りに平行な街路の方に向いている。また、新道も日本橋通りに対して平行方向に通されている。このことから、この地区では日本橋通りに平行方向の街路設計が卓越していたといえる。日本橋～京橋間では、日本橋通りに垂直方向の街路の秩序が卓越していたことから、この点に関して両地区間で秩序の整合性は保たれていなかったといえる。

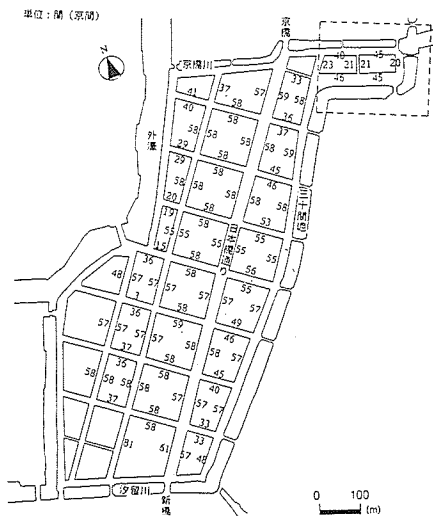


図7 京橋～新橋間 街区幅計測結果 (作成: 阿部)

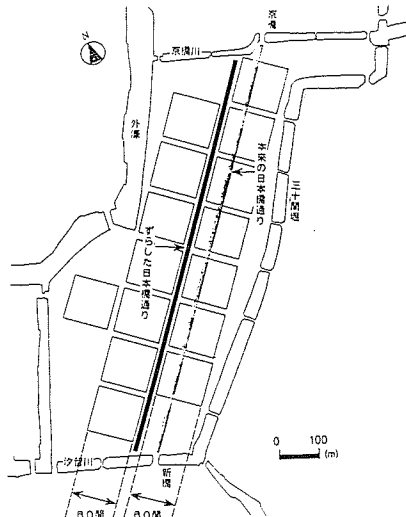


図9 京橋～新橋間 日本橋通りをずらした図 (作成: 阿部)

(2) 日本橋北地区 (図10)

ここは、外濠・日本橋川と神田川に挟まれた地区である。図10の網かけ部は、寛永期以降堀の開削が行われたため、当初の街区の計測が出来なかった。説明の便宜上、この地区を街区形態によりA～Gの地区にブロック分けをする。

計測の結果からこの地区をみると、以下のようになる。

1) 街区形態 (図11)

(1) Aブロック

1. 外濠、日本橋川沿いに不整形街区が存在する。
2. 日本橋通りと本町通りが交差するあたりに平行四辺形街区が存在する。
3. 本町通り～日本橋川間の、日本橋通りに平行方向の街区幅にばらつきがある。
4. 日本橋通り～西側日本橋掘留間の、本町通りに平行方向の街区幅が、通り沿いは60～61間、堀沿いは64～65間となっている。

(2) Bブロック

台形街区が存在する。

(3) Cブロック

本町通りに平行方向に長い、長方形街区が多い。

(4) Dブロック

1. 20間×60間の街区幅に近い街区が、2街区×3街区堀の間に並んでいる。

2. 日本橋川沿いに、三角形街区が存在する。

(5) Eブロック

平行四辺形街区と不整形街区が存在する。

(6) Fブロック

60間四方の正方形街区がほとんどである。

(7) G、Hブロック

不整形街区が存在する。

2) 街路交差角 (図12)

(1) Aブロック

日本橋通り方向の街路と、本町通り方向の街路が直角から3度ずれている (交差角87度、93度)。

(2) B、Cブロック

AブロックとBブロックの境で、本町通りは20度、本町通りは14度北へ屈折している。これを受けて、屈折後、Aブロックでは平行だった両通りが平行ではなくなり、浅草橋へ近づくに従って間隔が狭くなっていく。また、本町通りに対して直交する街路が多い。

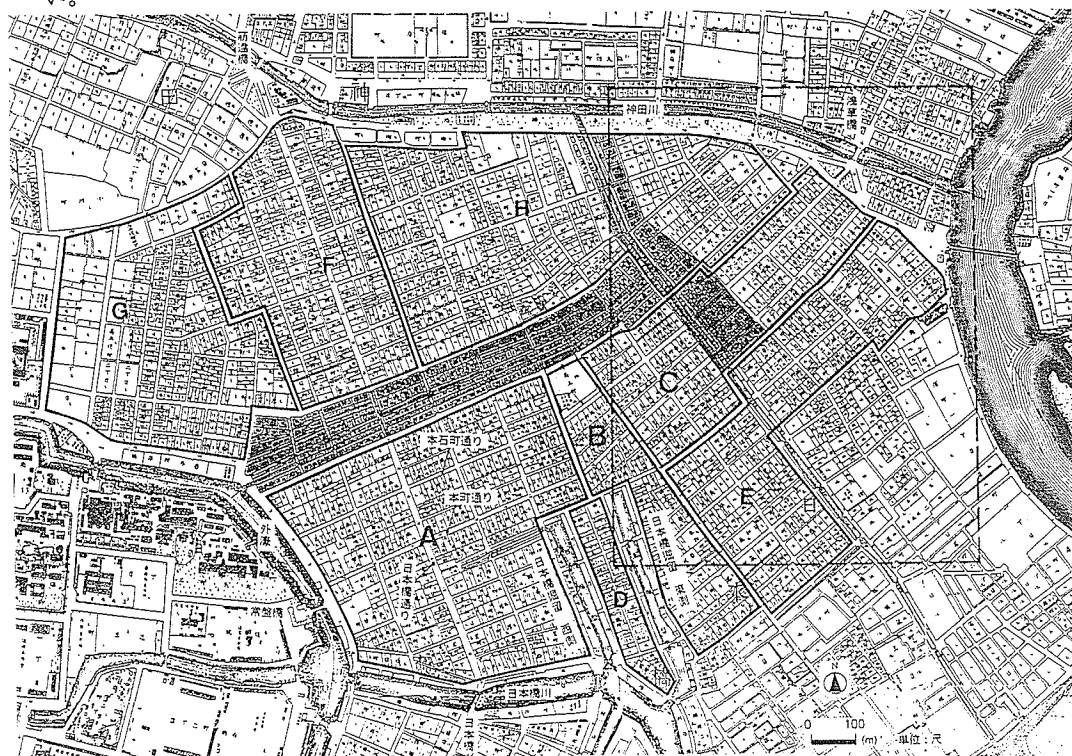


図10 日本橋北 内務省図
(原図 (引用文献20) に加筆)

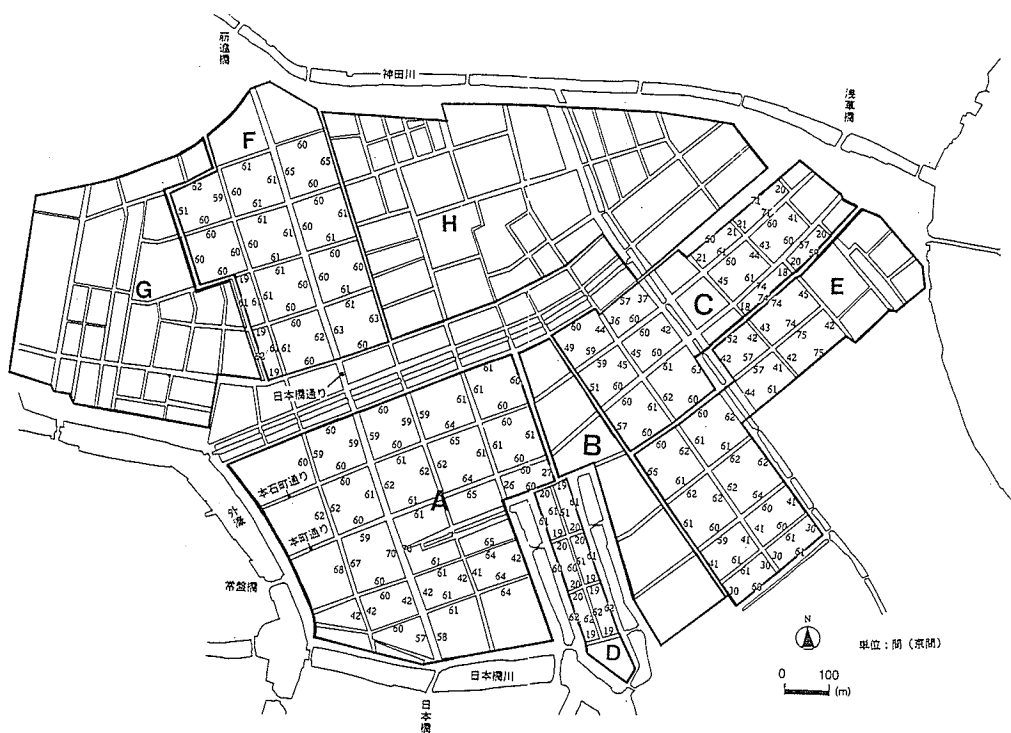


図11 日本橋北 街区幅計測結果 (作成: 阿部)

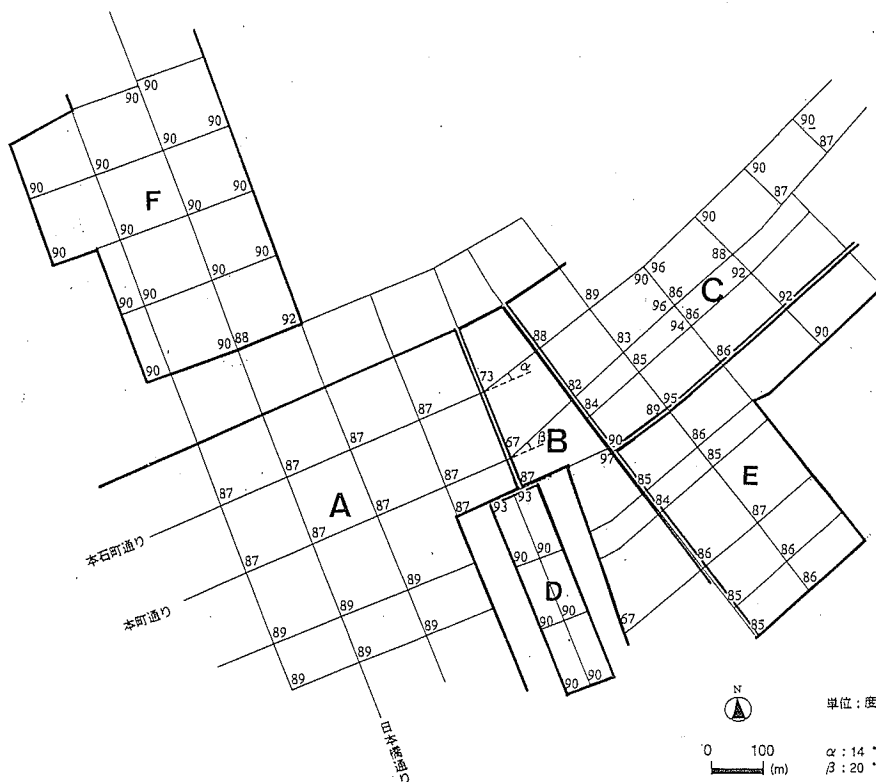


図12 日本橋北 街路交差角計測結果 (作成: 阿部)

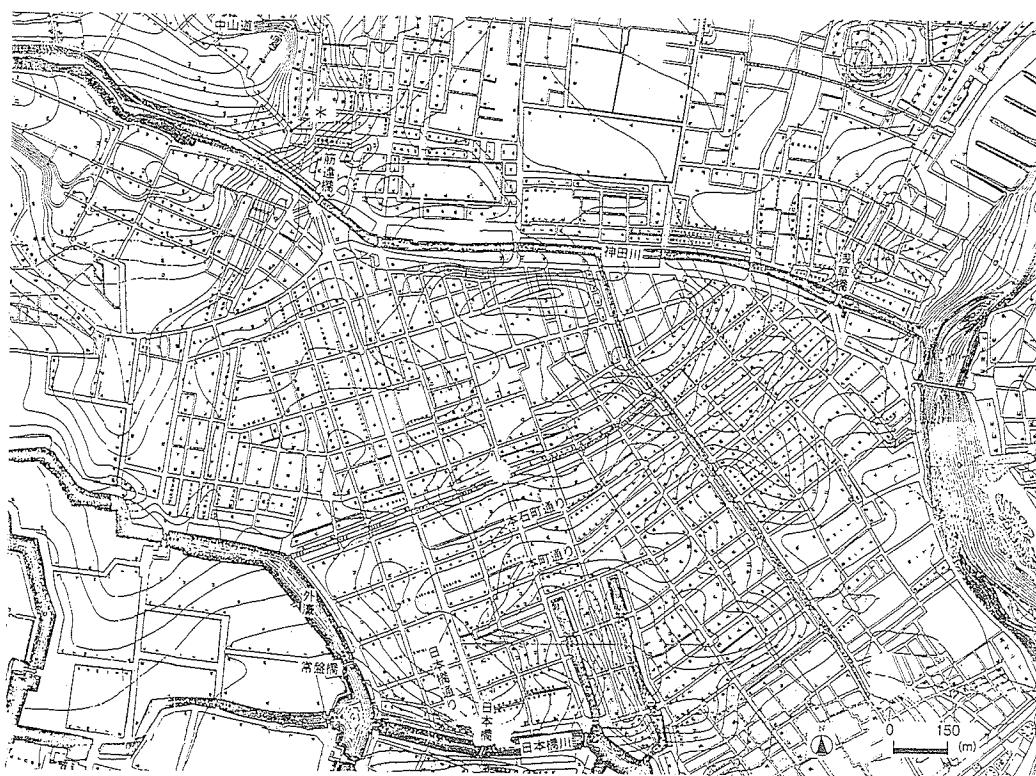


図13 日本橋北 東京全図（引用文献22）

(3)D、Fブロック

街路は直角に交差している。

(4)Eブロック

85度～87度で交差している街路が多いが、屈曲している街路もある。

(5)G、Hブロック

屈曲している街路もあり、街路が街区を基盤目状に区画するように通されていない。

3) 微地形（図13）

1. 本石町通りが微高地を通っており、微高地に合わせて屈折している。
2. 日本橋掘留の標高が低くなっている。

以上の結果から、次のように分析できる。

1. 本石町通りが微高地を通り、微高地に合わせて屈折していることから、まず、本石町通りを微高地に通すことを考えたといえる。
2. B、Cブロックで、本町通りではなく本石町通りに対して直交する街路が多く、また、本石町通りの軸が浅草橋に対してあたっていることから、このブロックでは、本石町通りが町割の軸であったと考えられる。

3. Bブロックでは、本石町通りの屈折に合わせて街路を交差させているために、街区が台形となっている。

4. Aブロックでは平行である本町通りと本石町通りの間隔が、屈折後狭くなっている。これは、1. 本町通りを浅草橋に近づけようとしたため、2. 本町通りの南にあった堀（図14）と通りとの間に町家をとろうとしたため、と考えられる。この両通りの幅が狭くなったために、間の街区が長方形となった。

5. Aブロックでは、本町通り・本石町通りに対して日本橋通りが直交していないために、街区が平行四辺形になっている。ここでは、街区の角度を直角にすることに先立って、通りを通したものと考えられる。日本橋通りを、本町通り・本石町通りに直交させなかったのは、日本橋北詰と図13の筋違橋の北の*の地点を結ぶように日本橋通りを通したためと考えられる。*の地点は、尾根筋を通ってきた中山道がちょうど駿河台を下り切った地点である。日本橋北詰から、本町通り・本石町通りに直交するように日本橋通りを通すと（図15）、日本橋通りが中山道に合流するのが駿河台の中腹になってしまうため、直交させなかったと

考えられる。筋違橋の南側橋詰にあてたとも考えられるが、日本橋通りが通されたときには神田川が開削されていなかった（1620年に開削）ことから、*の地点にあてたと考えるのがより合理的である。

6. 日本橋北詰は、日本橋の架橋位置によって決まる。この日本橋の架橋位置は、次のように決められたと思われる。まず、江戸前島地区の日本橋通りを微高地に通すことにより、南詰めが決まる。そこから、江戸前島地区の日本橋通りの軸に合わせて架橋方向を決め、架橋したと考えられる。この軸よりも東へ振ると橋のスパンが長くなってしまい、西へ振ると、日本橋通りと本町通り・本石町通りとの交差角がより鋭角になってしまう。
7. Aブロックの外堀・日本橋川沿いは濠・堀割運河に影響を受けた町割が行われたと考えられる。
8. Aブロックの本町通り～日本橋川間で、日本橋通りに平行方向の街区幅にばらつきがあるのは、屈折した西側の日本橋掘留の影響であると考えられる。
9. Aブロックの日本橋通り～西側日本橋掘留間で、本町通りに平行方向の街区幅が不整合なのは、まず日本橋通りの東に60間の街区が取れるように街路を通し、次に堀沿いに街路を通したためであるといえる。
10. Dブロックは旧石神井川の旧河口²⁴⁾であるが、この地区を見ると、20間×60間の街区幅に近い街区が東西方向に2街区、南北方向に3街区並び、整合性が保たれている。微地形を見ると、街区のあるところが微高地となっており、ここが旧河口

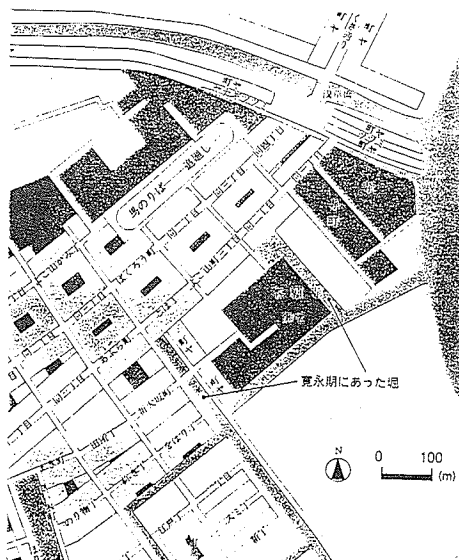


図14 日本橋北 図10点線部寛永期復元図
(引用文献21)

であったことを考えると、堀の開削の際の土を堀の間に盛土した形跡がうかがえる。このことから考えて、二本の堀は、堀の間に20間×60間の街区幅の街区が、2街区×3街区取れるように掘られたと考えられる。また、西側の堀は、日本橋を挟んだ日本橋通りの屈折に合わせて楓川～西側の堀が屈折するように、日本橋通りに平行に掘ったと考えることもできる。

11. Fブロックは、日本橋通りを軸に60間四方の街区をとるよう町割が行われたといえる。
12. Eブロックは、寛永期にあった堀（図14）が後に埋め立てられて町家となった地区である。長方形街区が多いが、街路が屈曲しているため不整形な街区となっており、規則性や町割の軸といったものの存在がみられない。また、地形的にも特徴がみられない。そのため、この地区における基準は見つけられない。
13. G、Hブロックは、不整形街区がほとんどでここでも基準は見つけられない。街区が基盤目状となるように、町割が行われたとは考えにくい。



図15 日本橋北 日本橋通りをずらした図
(原図(引用文献22)に加筆)

(3) 濠・堀割運河沿い(図16、17)

濠・堀割運河沿いには、奥行き20間の長方形街区が多い。これらの街区はみな、濠・堀割運河に面して配置され、さらに濠・堀割運河の両側に配置されていることが多い。江戸時代は舟運が交通の主要な役割を担っていたことから考えて、背後に町家が発達していなくても、濠・堀割運河沿いには奥行きほぼ20間の町家が配置され、これらの町家が舟運基地としての役割を担っていたのではないかと考えられる。

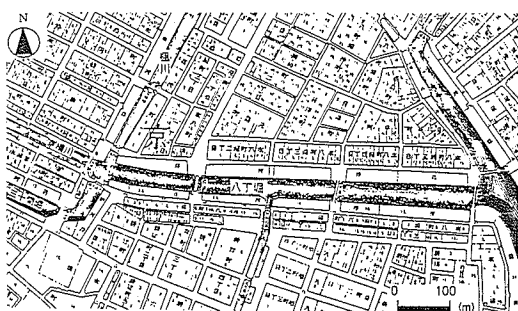


図16 八丁堀船入 内務省図(引用文献20)

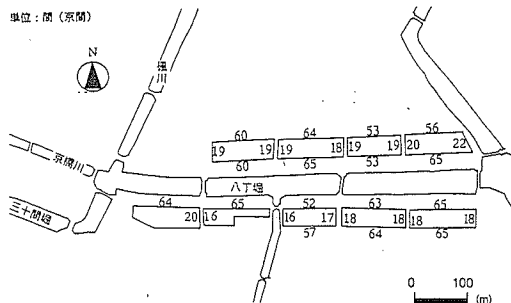


図17 八丁堀船入 街区幅計測結果(作成:阿部)

(4) 分析結果のまとめ

a) 地区単位で明らかになった点

今回の分析により、次の点を明らかにすることができた。

1. 江戸前島地区全体では、まず、日本橋通りが微高地に通された。次に、日本橋通りを軸として町割が行われ、その後、濠・堀割運河際では濠・堀割運河に影響を受けて町割が行われた。ただし、図7の点線で囲まれた地区では濠・堀割運河が町割の影響を受けて開削された。
2. 江戸前島地区の日本橋～京橋間では、町割と船入堀が同時期に計画された。
3. 日本橋北地区において、既存研究^{25) 26)}では本町通りが微高地に通されたとしている。しかし、今回の分析により、微高地に通されたのは本石町通りであることが分かった。本石町通りがまず微高

地に通され、日本橋通りと本石町通りが交差する辺りでは、日本橋通りと本石町通りの2つの街路を軸として町割が行われた。ここを離れると、それぞれ日本橋通り・本石町通りのみを軸とする町割が行われ、最後に濠・堀割運河際の町割が行われた。

4. 日本橋堀留周辺では、堀の影響を受けた町割が行われたが、堀自体も堀の延長や堀間の幅など、町割の影響を受けて開削された。
5. 八丁堀船入などの濠・堀割運河沿いでは、奥行きほぼ20間の町屋が、舟運基地として配置された。

b) 地区単位で議論の余地がある点

次の点については、今回の分析でおおよそ明らかにすることができたが、今後、議論の余地があると考えられる。

1. 本町通り・本石町通りに対して日本橋通りが直交していないのは、既存研究²⁷⁾では日本橋通りが旧石神井川の河道に並行に通されたためとしている。しかし本研究では、日本橋通りを、日本橋北詰と図13の筋違橋の北の*の地点、すなわち中山道が駿河台を下り切る地点を結ぶように通したため両通りが直交していないと考察した。
2. 日本橋北地区の日本橋通りや本町通り・本石町通りから離れた地区では、街区を碁盤目状に区画するように設計していなかったのではないかと考えた。こうした地区はかつては寺社地であったり、古くから町が存在していたことから、碁盤目状でない何か別の基準があったと考えられる。今回の分析では、こうした地区の町割に関する基準は見つけられなかった。
3. 日本橋北地区において、本町通り本石町通りが屈折後両通りの間隔を狭めているが、これは本町通りが屈折後、浅草橋へのアクセス、本町通りの南にあった堀(図14)との関係から、本石町通りに近づくよう通されたためであると考えられる。この両通りの間隔が狭くなったために、間の街区が長方形となった。

c) 町人地全体

町人地全体では、次のようにまとめることができる。

1. まず町割の軸となる通りを微高地に通し、次に、主要な通りを、軸となる通りとの関係や、地形・水系などを考慮しながら通す。
2. これらの通り沿いの町割を、通りを軸として行い、最後に濠・堀割運河沿いや通りから離れた地区での町割を行う。

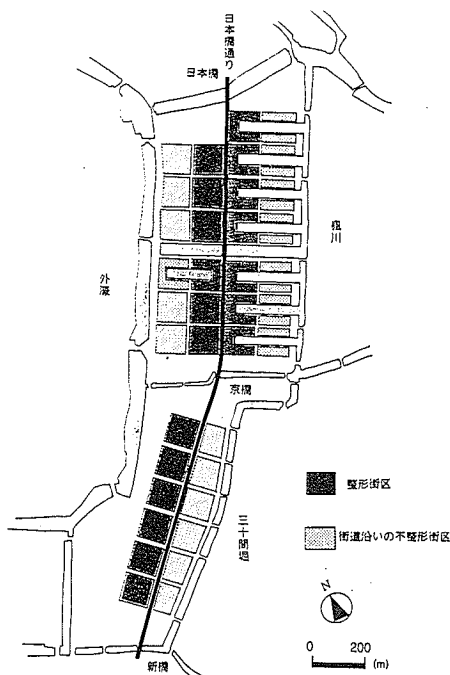


図18 江戸前島地区設計過程-1 (作成: 阿部)

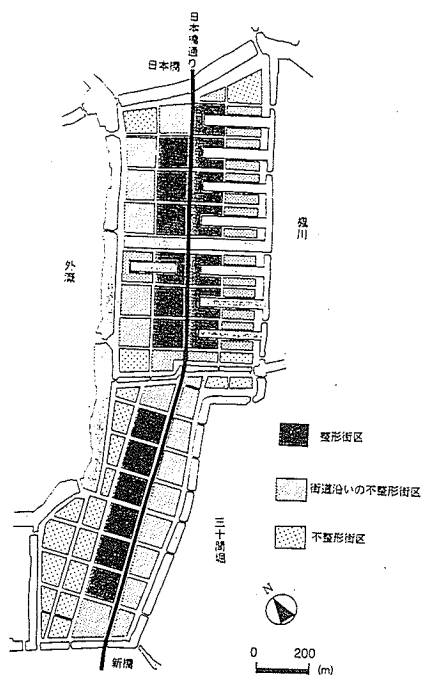


図19 江戸前島地区設計過程-2 (作成: 阿部)

3. 濠・堀割運河際では濠・堀割運河の影響を受けた町割が行われたが、一部の濠・堀割運河では濠・堀割運河自身が町割の影響を受けて開削された。つまり、水系と町割の基準では、厳密な整合性は取られていなかった。

6 計画・設計の実際のとまめ

分析結果をふまえ、どのような順序で町人地が設計されていったかを、地区毎にまとめてみる。外濠・日本橋川・堀川・京橋川・三十間堀は、一部を除き町割に先立って開削されたと考えられるが、街道位置は同時に設定されていたと考えられる。開削位置は、中世までの江戸の地形に、大きな影響を受けて決められたと考えられるが、前述したように、町割との整合性を考慮して濠・堀割運河が開削された地区もある。神田川は、町割の行われた後、1620年になって開削された。

(1) 江戸前島地区

1. 微高地に日本橋通りを通し、日本橋通り沿いに、通りを軸とした町割を行う。ただし、日本橋～京橋間では、船入堀との整合性を保って町割を行う(図18)。

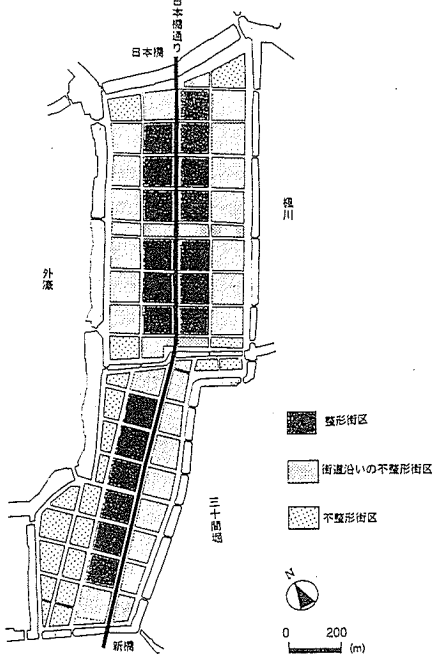


図20 江戸前島地区設計過程-3 (作成: 阿部)

2. 濠・堀割運河際を濠・堀割運河に合わせて町割を行う(図19)。

3. 船入堀を埋め立てて町家とする(図20)。

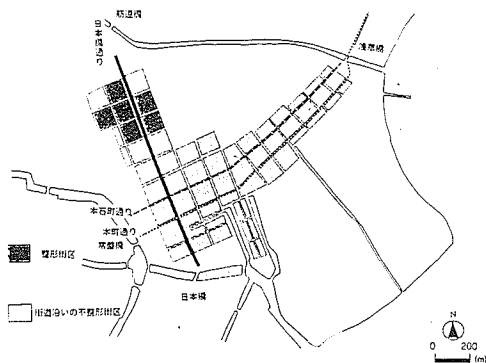


図21 日本橋北地区設計過程-1 (作成: 阿部)

(2) 日本橋北地区

1. まず、本石町通りを微高地に通し、その南に本町通りを通す。日本橋通りを、日本橋北詰と中山道が駿河台を下りきる地点を結ぶように通す。
2. 二本の日本橋堀留を、堀の間に取る街区と、日本橋通りを意識しながら掘る。
3. 日本橋通りと本町通り・本石町通り沿い、および日本橋堀留沿いの町割を行う(図21)。
4. 濠・堀割運河際と通りから離れた地区の町割を行う(図22)。

7 結論

1. 城下町の計画・設計を読み解くための視点として、地図計測に基づく街区形態・街路交差角・微地形の分析が有効であることがわかった。
2. 次にその分析の視点に立ち、従来はマクロな視点のみからしか、明らかにされていなかった江戸下町町人地の都市の計画・設計の実際を、地区単位で読み解くことができた。
3. 地形、街道と町割との関係を明らかにした。
4. 水系と町割の関係を、定量的には明らかにすることはできなかった。

8 今後の課題

1. 沽券図、町触、下水路網(『寛保沽券図』)等の援用により、街路の幅員、濠・堀割運河・河岸地の幅員に関する分析も行う必要がある。
2. 濠・堀割運河の位置・開削年代に関しても研究の余地がある。
3. 江戸の他の地区に関しても、同様の分析を行う必要があると考えられる。

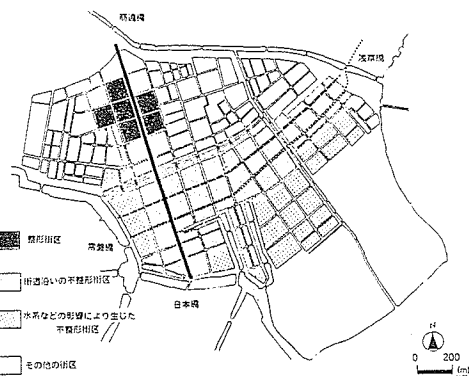


図22 日本橋北地区設計過程-2 (作成: 阿部)

謝辞

最後に本研究をまとめるにあたり、東京大学建築学科の伊藤毅先生、千葉大学建築学科の玉井哲雄先生、都市史研究家の鈴木理生氏から、ご教示を賜ったことを厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 玉井哲雄:『江戸 失われた都市空間を読む』,平凡社, pp.24-27, 1986年
- 2) 参考文献1), pp.26-27, pp.41-44
- 3) 高橋康夫他編:『図集 日本都市史』, 東京大学出版会, pp.206-207, 1993年
- 4) 鈴木理生:『幻の江戸百年』, 筑摩書房, p.98, 1991年
- 5) 参考文献4), pp.96-132, pp.183-186, pp.199-205
- 6) 内藤昌:『江戸と江戸城』, 鹿島研究所出版会, pp.121-128, 1966年
- 7) 参考文献4), pp.130-136
- 8) 参考文献1), p.44
- 9) 参考文献4), p.134
- 10) 参考文献1), pp.42-44
- 11) 参考文献3), pp.206-207
- 12) 参考文献4), pp.132-136
- 13) 参考文献6), pp.121-125
- 14) 参考文献1), pp.39-44
- 15) 参考文献4), p.98, pp.132-136
- 16) 陣内秀信:『東京の空間人類学』, 筑摩書房, pp.22-26, 1992年
- 17) 参考文献1), pp.39-44
- 18) 参考文献4), pp.134-136
- 19) 参考文献16), pp.25-26
- 20) 地図資料編纂会編:『江戸東京市街地図集成~内務省地理院発行縮尺5千分1東京実測全図~』, 柏書房, 1988年
- 21) 国立歴史民俗博物館:『国立歴史民俗博物館研究報告 第23集』, 国立歴史民俗博物館, 1989年
- 22) 地図資料編纂会編:『江戸東京市街地図集成II~縮尺5千分1東京全図~』, 柏書房, 1990年
- 23) 建設省国土地理院所蔵:『五千分一東京図測量原図』, 日本地図センター, 1984年
- 24) 参考文献4), p.101, p.135
- 25) 参考文献1), pp.39-44
- 26) 参考文献4), pp.132-134
- 27) 参考文献4), p.135

参考文献

- 1) 鈴木理生:『江戸の都市計画』, 三省堂, 1988年
- 2) 鈴木理生:『江戸の川 東京の川』, 井上書院, 1989年
- 3) 高橋康夫他編:『日本都市史入門I』, 東京大学出版会, 1989年
- 4) 高橋康夫他編:『日本都市史入門II』, 東京大学出版会, 1989年
- 5) 矢守一彦:『城下町のかたち』, 筑摩書房, 1988年
- 6) 矢守一彦:『城下町の地域構造』, 名著出版, 1987年
- 7) 矢守一彦:『都市プランの研究』, 大明堂, 1970年
- 8) 都市史研究会編:『年報 都市史研究2 城下町の類型』, 山川出版社, 1994年
- 9) 小木新造編:『江戸東京を読む』, 筑摩書房, 1991年